

獨協医大病院が県内初

獨協医大病院はこのほど、失明などを引き起こす難治性の目の疾患がある患者に移植するため、胎児を包む羊膜を出産時に採取、保存する「羊膜バンク」を県内で初めて設置した。これまでは県外の病院か

ら時間をかけて取り寄せていたが、バンクの設置により、安定した移植手術の体制を確立する。将来的には採取した羊膜を他院に供給する仕組みも目指す。
(野中美穂)

「羊膜バンク」を設置

羊膜は胎児を包む卵膜の一部。同病院によると「角膜上皮障害」や「角結膜潰瘍」といった患者に移植することで、結膜や角膜の再生を助けたり、炎症を抑えたりするなどの効果がある。



伊藤栄医師

移植用の羊膜は、一般社団法人日本組織移植学会か



羊膜バンクで保管する羊膜。元は白色だが、保存液のピンク色に染まっている(獨協医大提供)

目の難病疾患に移植

手術体制安定と 他院供給目指す

移植をまかなえる。

同病院は2020年か

ら、羊膜移植手術を始めた。実施件数は20年度の7件から24年度は21件に増え、茨城、群馬、福島県など近県からも患者が集まっている。

的な認定を目指していく。

3月に院内にバンクを設

置して以降、患者5人に移植手術を行った。伊藤医師は、再生医療の一種である羊膜バンクを通じて「人工多能性幹細胞(iPS細胞)」といったより高度な再生医療にも関わることを目指していきたい」と強調する。

際、千葉県病院から3、

ら認定された医療機関が、バンクとして採取、保存す

る。帝王切開で出産する妊婦の協力を得て胎盤から羊膜を剥がし、冷凍庫で最長2年間保存する。妊婦1人の羊膜で患者20〜30人分の

より上級に当たる、自院で保管する羊膜を他院に送ることができるカテゴリーの医療機関は全国に7カ所あり、獨協医大病院も将来

4日をかけて羊膜を取り寄せていたため、緊急手術に対応することが難しかった。

眼科医の伊藤栄医師

(36)は、移植手術を始

めるのと同時期から職員とバンク設置の準備を進めた。実績を積み昨年12月、学会から院内で羊膜の採取、保存、利用ができるバンクのカテゴリーに認定された。